緋弾のアリア～誓いの一閃～

なげっと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～誓いの一閃～

【Ｎコード】
Ｎ０８８６Ｘ

【作者名】
なげっと

【あらすじ】
巻き込まれ体質の軌条梗稀。
武偵高で始まる新たな生活。
平穏に過ぎる訳もなく彼はトラブルに巻き込まれる毎日を送っている。
子供の頃の悪夢。誓った決意。
彼は仲間と共に突き進むのである・・・
これは緋弾のアリアの二次創作です。

装填１　出会い（前書き）

ＨＥＴＡＫＵＳＯですが
生暖かい目で見てください（＾＾；）

装填１　出会い

血に染まる部屋
人の死体の山
血の滴る刃
立ち尽くす少女

少女の目には生気が感じられずただ笑っているだけ、
惨劇の夜。

少年は恐怖に震え、その少女の言葉を聞く
「ア・・ビ・・ョ・・・・ッテ・・・フフフ」

「・・・！」
悪夢に魘され目が覚める。

時刻は７時５６分。
バスには間に合わない。
「完全に遅刻じゃねぇか…。」
俺は武偵高行きのバスを諦め、自転車通学を決意する。

にしても・・・なんであの記憶が今更・・・
武器などを調えながらあの悪夢について考えていると、時刻は５８分を回った。
「ヤベっ！！遅刻する！！」
あわてて自転車にまたがり、武偵高へと向かう。
この出来事を俺、軌条（きじょう）　梗稀（こうき）は

一生忘れる事はないだろう・・・

数分後、俺は自転車を漕ぎ、よくわからない状況を整理していた。
なんだ？この状況は？
なぜ俺がこんな変な二輪に銃口を向けられなきゃならんのだ？
向けられている銃はＵＺＩ。秒速１０発の９パラをぶっ放す
イスラエルＩＭＩ社の傑作短機関銃（サブマシンガン）である。

まぁ・・・武偵高だからこんなイタズラは日常茶飯事だが・・・

「その　チャリには　爆弾が　仕掛けて　あり　やがります」

なんか物騒な事言ってるし、異様にムカツクなこの声・・・

俺は一応片手で自転車を探ると、確かにあった。プラスチック爆弾。
しかも車だって吹き飛ぶ量の爆弾が、今まさに俺の尻の下にあるのだ。

携帯に手を伸ばそうとしたその時、
「助けを　求めては　いけません　携帯を　使用した　場合も
爆発　し　やがります」
マジでか！！

誰だこんな手の込んだイタズラしたやつは！！
見つけたらフルオートで射撃してやる！！

ん。前にいるのは…

「よぉキンジ。奇遇だな！お前もか！」

「梗輝か！？お前もまさか・・・！？つーかの状況わかってんのか！？」

どうやらお前も同じ星のもとで生まれたみたいだな。

そう。俺達は武偵殺しの模倣犯に世にも珍しいチャリジャックに遭っている。

「分かってるとも。だが・・・なぁ？俺一人なら助からなくもないが・・・お前も同時にとなるとなぁ・・・」

助かる方法はある。ただ2人は難しい。

「な！？ふざけんな！友達を見捨てるな！！」

キンジの叫びを無視し、ちょっと空を見る。

ん？女子寮の屋上に誰か居る。

「おいキンジ！あれ・・・」

遠目でもわかるピンクのツインテール。

「ん？」

キンジが見たその瞬間、少女は屋上から勢い良く飛び降りた！

何してんだ！あいつ！

パラシュートを開き、こちらに向かってくる・・・ってえぇぇぇぇ！！！

「うお！！こっちくんな！！このチャリには爆弾が・・・」

と言おうとした時、

「ほらそこの馬鹿共！！さっさと頭下げなさいよ！！」

えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

何だコイツ！？なんて考えてる時にはもうセグウェイは

少女の放った水平撃ちで破壊されていた。
「あの不安定な体勢で・・・！」
キンジは驚きに目を見開いていた。
それもそのはず
少女はパラシュートからたった1人でＵＺＩを積んだセグウェイを
２機同時に破壊したのだから・・・

安心したのも束の間、まだこのチャリには爆弾が積んである事を思
い出す。
「おい！この自転車には爆弾が仕掛けられてる！！
一緒に吹き飛ばされたくなけりゃさっさと逃げ・・・ぐはぁ！！！」
顔面を思いっきり蹴られた。クソ痛ぇ！！
「バカ！！武偵憲章１条！！『仲間を信じ　仲間を助けよ！』――
――いくわよ！！」
と言ったが俺は、
「俺は大丈夫だ！！キンジだけを助けてくれ！！」
助かる方法は・・・ある！！
「じゃあなキンジ！！生きてたらまた会おうぜ！！」
俺はさらに加速し、少女の居る間逆の方向にハンドルを切る。
少女は、キンジを優先し助けるつもりになってくれたらしく、
逆さ吊状態になっている。
おそらくそのまま受け止める気なのだろう。
よかった・・・あんな方法じゃなくて・・・。
まぁこっちのほうが危険ではあるがな・・・

などと思いつつ、ビルの壁に
特性の『ワイヤー弾』を発射し
自転車のペダルを思いっきり蹴ってワイヤーに手を伸ばした。
今まさに宙吊り状態である。

「キンジは平気だろうな・・・」

『武偵殺し』の模倣犯による犯行と見て間違いないだろう。
手口がそっくりだし。

「つーか・・・・・自転車がぁ・・・」
最近買ったばっかの自転車が・・・
２万だぞこの野郎！！捕まえたら綴に送って尋問地獄を・・・
などと考えながら俺は歩き出すのだった。

武偵高、東京武偵高校とはレインボーブリッジの南に浮かぶ
南北およそ２ｋｍ・東西５００ｍの長方形をした人口島、通称『学園島』である。
その学園島の中にあるのが武偵の総合教育機関である。
そもそも武偵とは凶悪化する犯罪に対抗するために作られた国家資格。
武装を許され、逮捕権を持つ用は便利屋。
ただ警察と違うのは『武偵は金で動く』ということだ。
武偵は武偵法が許す限りどんな事でもできる。
しかし、武偵が犯罪を犯すと通常の３倍の刑になる。これを『武偵３倍刑』という。

とんだ余談だったが話を戻そう

俺がキンジを探し当てるのに時間は掛からなかった。

キンジは体育倉庫前で少女と取っ組み合っていた。

ていうかキンジは何もしてないな・・・
それになぜかヒステリアモードだし・・・
まさか！？あの娘に何かしたのか！？
・・・まさかな。

そうしてる時、キンジが突然こっちを向いた。
やべっバレたか！？
なんて思ったが違う。さっきの奴だ！！
「アリア！！危ない！！」
とっさに叫んだキンジだが、ＵＺＩはとっくに迫ってきている。
アリアというらしい彼女はキョトンとしてる。
まずい！！キンジじゃ間に合わん！！
「しゃーねぇなぁ・・・」
俺はホルスターからＤＥを取り出し、即座に発砲した。
とっさの事だったので腕に痺れが残る。
やっぱ痛ぇや。居合い抜きは。

アリアが動くのはそう遅くなかった。
「こっこの、強猥男！！神妙に・・・わきゃお！！」
銃弾に気づかず転んだ。わきゃおってなんだよ・・・ｗｗ
少し笑いを堪えつつ、
「キンジｗ早く逃げるぞ！！」
さっさと逃げることにした。
朝の空に大きなアニメ声が響き渡る
「この卑怯者！！でっかい風穴開けてやるんだからぁ！！」

しかしこれはまだまだプロローグに過ぎない・・・

ともあれ
これが後に命を預ける仲間となる神崎・H・アリアとの出会いである。

第1弾　理子の暴走トーク

「キンジ！よかったなぁ生きてて」
俺が机に突っ伏しているキンジに話を振るが・・・
こりゃ本格的にダメっぽいな・・・
なんせヒステリアモードを見られちまったからな。

ちなみにヒステリアモードとは正式にはヒステリア・サヴァン・シンドローム
一定以上の恋愛時脳内物質が分泌されるとそれが常人の３０倍以上の量の神経伝達物質を媒介し大脳・小脳・脊髄といった中枢神経系の活動を劇的に亢進させる。
しかしコイツは中学時代のトラウマもありこのモードになりたがらない。
まぁその話はおいおいするとして・・・

「よぉキンジ、梗稀！同じクラスか！！」

この話しかけてきたバカは車輌（ロジ）科の武藤剛気。

「やぁ。おはよう」
コイツは強襲（アサルト）科の不知火亮。

「おはよう・・・てか武藤！朝からうっせぇ！！」
等とギャーギャー言い合っているうちにＨＲの時間である。

早速事件は起きた。
「先生、私あいつらの真ん中に座りたい」
神崎・H・アリアはそう宣言した。

・・・なんで俺まで？
俺は何もしてないぞ。助けた以外は。
まぁキンジよりマシか・・・
バレないように頭抱えて震えてるしな。
つーかバレバレだ。

「なんでよりによって・・・！」

「キンジ。何したかは知らんが覚悟を決めろ。」

「何もしてない！誤解だ！！」

「よ、よかったなキンジ、梗稀、なんか知らんがお前らにも春がきたみたいだぞ。　先生、俺、席かわりますよ」

武藤てめぇ！！友達を売りやがった！！今度から絶対奢ってやんねぇからな！！

アリアがキンジへ近づいていく。

「キンジ、これ、さっきのベルト」
ぽいっと投げられ、それをキンジがキャッチした。

「梗稀。あんたも」

ゴトっと青龍が彫られたＭ９３Ｆが置かれる。
落としちまってたのか・・・どうりで無い筈だ。
てかなんで名前知ってんだ？名乗ってないのに・・・
数々の疑問が浮かぶ中、一人の女子が立ち上がり・・・
「理子分かった！　分かっちゃった！　これフラグばっきばっきに立ってるよ」
キンジの隣の席の峰理子が大きく挙手し、
「キー君ベルトしてない！
そして、ベルトをツインテールさんが持ってた！　これ謎でしょ！　謎でしょ！
でも理子には推理で来た！　できちゃった！
あれ？　コー君の銃は何かな？何かな？　あ！分かっちゃった！」
この急に爆弾トークと繰り広げたのは峰理子。
探偵科（インケスタ）ＮＯ．１のバカだがランクはＡ。
制服はゴスロリ風？だっけかに改造されてる。
キー君は彼女の前でベルトを取る何らかの行為をした！
そして、彼女の部屋にベルトを忘れてきた！　でも、彼女はコー君の彼女で！
嫉妬したコー君は銃を持って乱入した！そんでもって●●●！！
つまり、３人は彼女を挟んで恋愛の真っ最中なんだよ！！！」
待て待て！！なんでそうなる！！そんなアホの推理を誰が・・・
「き、キンジと梗稀がこんな可愛い子といつのまに！！」「影の薄い奴らだと思ってたのに」

「不潔だわ！！不純だわ！！」

あ～あやっちまった・・・

このバカ共め・・・真に受けやがって！！

俺とキンジが諦めた瞬間

ズキュンズキューン

2発の銃声で皆が黙った。

顔を真っ赤にしたアリアが銃を撃ったのだ。

「れ、恋愛なんてくだらない！」

あっれ～？恋愛より否定するとこあるでしょうよ～

全員が顔を真っ青にし、元凶の理子はゆっくりと席に着いた。

ちなみに、銃は必要以上に発砲しないとルールがあるが、

必要以上にと書いてある。つまり、してもいいのだ。

まぁこ～んな過激な自己紹介は過去にも、そしてこれからもないだろう。

「全員覚えておきなさい！　そんな馬鹿なこと言う奴には・・・」

後に散々聞かされる事となる言葉を言い放つ

「風穴開けるわよ！！」

第2弾　奴隷☆

朝の自己紹介から数時間、
現在は昼休みである。

バカのクラスメイトの事だから、
どうせ質問攻めに遭うだろう。
そう思って銃の弾倉(マガジン)には『ワイヤー弾』を装填しておいた。

俺は窓から飛び出て、ワイヤー弾を校舎に撃ち、
さっさと避難した。
よし。これで安心してメシが食える
キンジには悪いが囮になってもらおう。

俺は持参してきたコンビニ弁当を食い、携帯を確認する。

携帯には今朝の事件の内容が書かれていた。
恐らく諜報科(レザド)と情報科(インフォルマ)が調べたのだろう。
お早いこって。

するとメールがきた。
装備科(アムド)の平賀さんからだ。

内容は「注文の品できたのだ〜！
5時間目の実習の時間に来るといいのだ！！」

とのこと
注文の品というのはいわゆる俺専用の武器だ。

まぁ色々使うからあまり出番はないと思うが・・・

ちなみに『実習』とは
武偵高は午前中、一般教科(ノルマーレ)と呼ばれる通常の高校同様の授業だが
5時間目からは武偵専用の授業がある。
たとえば強襲科なら射撃訓練、車輌科なら操縦訓練といった感じだ。
俺は強襲科だが既に単位は足りているので、1日ぐらいサボタージュしても問題ない。
ついでに言っとくと、武偵は単位を依頼(クエスト)で稼がなければ
留年してしまうので必死になって稼ぐ奴もいるとか。

というわけで装備科棟。

俺はひらがあやと書かれたドアの前にいる。
インターホンを鳴らすと、
小柄な武偵が出てきた。
「あやや？梗稀君。お待ちしてましたなのだ～☆
ささっ！あがってあがってなのだ～」
というのでお言葉に甘えさせてもらい部屋へ
相変わらずごちゃごちゃした部屋だな。

「で？注文の品が出来たんだろ？」
俺が聞くと
「もちろんなのだ！！あややの仕事に抜かりはないのだ！！」
と言って机の中に頭を突っ込んで探している。
どこに何があるかよく分かるなぁ・・・

まぁ天才だからなこの人は、

「あったのだ！これなのだ！！」
じゃ～～ん！！と言って見せてくれたのは
折りたたみ式の槍である。
開いてみると刀身には紅蓮の朱雀が彫ってある。
おお！！注文どおりだな！！
にしても・・・本当にすごいなこれは・・・

「確かに。で、料金は？」

平賀さんは
「梗稀君はお得意様だから特別に２０万でどうなのだ？」

うん。この品ならその料金でも文句はない。
もっと値が張ると思ったがその値段なら。

「よし！それじゃ確かに。」

俺は面倒だったので小切手で渡した。

「ありがとうございましたなのだ～☆」

俺は装備科棟から出て自室に向かったがとんでもない事になっていた。
家具は壊れ、壁には風穴が出来ている始末。

聞けば、どっちがテレビを見るかで揉めていたらしい。
仕方ないので強襲科の奴らをほっといてキンジの部屋に行くことにした。
修理できるまでの仮住まいだ。
キンジは3コール目で出た。
「キンジか？ちょっとうちのバカルームメイトが家具やら壊しちまったから
しばらく泊めてくんねぇか？」

キンジは
「わかった。じゃあ来いよ。」
キンジの了承も得たので、探偵科の寮へ向かう事にした。

今日車輌科で購入したホーネット２５０を発車させる。

そのせいで金も減ったけどな。
でも歩くよりはマシだしな。

「よぉキンジ。おじゃまするぜ。」

「あぁ梗稀か？あがれよ」

一応おじゃましますとは言ったが、この部屋にはキンジしかいない。
探偵科に転科した時、たまたまルームメイトになる生徒が居なかったため
1人で住んでるらしい。

この広い部屋全部を1人でとは羨ましいな・・・
風呂もテレビも独占できるって、うちじゃ考えられねぇな。

「そういえばキンジは強襲科に戻らねぇのか？」
先輩からも一目置かれているのに。
ちなみに俺達は入試の時に試験官をぶちのめし、
Sランクっつー格付けを貰っていた。
まぁ今は色々あってBランクだけどな。

「言ったろ？俺は4月には武偵の世界から足を洗うって」

残念だな。お前と一緒に薬莢拾いやらされて
ウサ晴らしに行ったクエストで連続殺人犯捕まえたのが懐かしいぜ・・・

なんて適当にだらけていると

ピンポーン

インターホンが鳴った。
キンジを見たが無反応。
このインターホンは白雪じゃないな。

ピーンポーン

再び鳴るインターホン

相変わらずの無反応。

居留守でも使う気か？
ピンポンピンポンピンポーン
連打しだしたぞ！怖ぇ！！
キンジは立ち上がり、
「あぁ、もう、うるせえなぁ！！」
さすがに我慢できなかったのかドアへ向かう。
俺も後ろに着いていった。
「誰だよ！？」
キンジがそういうと、ドアの前には
トランプ柄のトランクを持った、神崎・Ｈ・アリアがいた！！
「遅い！！私がチャイム鳴らしたら３秒以内に出ること！！」
いきなりやってきて、赤紫色（カメリア）の瞳を吊り上げ
トランプ柄のトランクを持った、神崎・Ｈ・アリアがいた！！
「「神崎！？」」
アリアは当然のように
「アリアでいいわよ」
と答えた。なんだ？なんなんだこの状況は！？
ずかずかと踏み込んでくるアリアと目が合う。
「梗稀も居るの？好都合ね・・・」
と呟いた。

好都合？なんのこっちゃ・・・
その疑問が解決されるのは遅くなかった

アリアはトランクを中に入れておきなさいと命令すると
窓の前まで寄ってこう宣言した。

「キンジ、梗稀、あんた等私の奴隷になりなさい！！」

いきなりの奴隷宣言。

この言葉が、２人の人生と生活を大きく変えて行くのである。

Ｇｏ　Ｆｏｒ　Ｔｈｅ　Ｎｅｘｔ！！！

第2弾　奴隷☆（後書き）

軌条　梗稀

武器：槍（朱雀の彫られた　銃（青龍の彫られた
　　デザートイーグル1丁
　　？？？？

性格：フレンドリー

キンジと同じ2年正。キンジとは中学からの友人で、
よく一緒に居る。全体的にオールマイティな戦闘スタイルで
一部では2つ名がある。
特に近接に特化していて中距離、近距離ならＨＳＳにも引けを取ら
ない実力者。
過去に一族の１０分の４を殺された事がある。
切り札を3枚隠し持っている。
Ｂランクとされているが Ｓランクとの噂もある。
容姿は女性のような綺麗な顔立ちのため
子供の頃は女と間違えられていた。
それがコンプレックスでもある。
極度の巻き込まれ体質である。
キンジの様な特殊体質を持っている。

第3弾　白虎の武器

「は？」
俺はいきなりの奴隷宣言に
頭が真っ白になった。
当然、キンジも同様に。

「奴隷になりなさい」だと？
何が言いたいんだ？コイツ？

「ほら！さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ！
無礼な奴ね！」

人の家に上がりこんで飲み物の催促する方が無礼だろ…
アリアはそのままソファーに座り、話を続ける。
「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！
砂糖はカンナ！1分以内！」

恐らくコーヒーの種類なのだろうが、
俺にはさっぱりだ。

キンジにまばたき信号（ウィンキング）で
こいつ簡単に引き下がらねぇぞ。と送ると
そうみたいだなと帰ってきた。

とりあえず待たせすぎると発砲しかねないので、
キンジがインスタントコーヒーをアリアに出す。

コーヒーに鼻を近づけ、匂いを嗅いで不思議そうな顔で
「これ本当にコーヒー？」
「それしかないんだから有難く飲めよ。」
アリアはコーヒーを一口飲んでから、
「変な味…ギリシャコーヒーに似てるけどちょっと違う」
と呟いた。
コイツ、インスタントコーヒーを知らないのか？
そんなことを思いつつ、視線をアリアに戻す
「つーか何でまた家に押しかけて来たんだよ。」
キンジがアリアに質問をする。
アリアはキンジに向かって、
「わからないの？」

「わかるか！！」
まぁその意見には同意だが、
俺には分かったぞ。
今朝の件と照らし合わせればな・・・
一部始終しか見てないが、キンジがアリアに何かしたっていうのは明確だろう。
「梗稀は？」
アリアは俺に話を振る。

「さぁな。ていうか何で俺の名前知ってんだよ？」
と今まで言えなかった事を言う。
「武偵なら自分で調べなさい。」
とキツイ一言を貰った。
まぁ、多分調べたんだろうな。

「まぁいいわ。」

「おなかすいた。」

・・・は？

急に何を言い出すんだコイツは・・・

ていうか話題が１８０。変わったな。

「この辺に松本屋のももまん売ってる所無い？私食べたいな」

いやいや…ありえないだろこれは

「じゃっコンビニ行くか」

俺が提案すると、

「こんびに？ああ、あの小さいスーパーの事ね。

じゃあ行きましょ」

なんでお前が仕切る。まぁいいけど

「じゃあってなんだよ」

「バカね食べ物を買いに行くのよ。もう夕食の時間でしょ」

という訳で、じゃんけんして負けたキンジに

弁当のおつかい（パシリ）を頼んで、

俺は今、キンジの寮の個室に居る
ようは
俺の仮部屋だ。

ピンポーン

チャイムが鳴る。
今日は客が多いな。まぁ1人はほぼ不法侵入だが

届いたのは俺宛の荷物だった。

差出人は不明。ただ、俺の実家の住所だった。
「なんだこれ？」
届いたのは剣だ。
しかも相当な業物の

刀身には白虎が彫られており、
刀身は鋭く、白銀に光っている。

手紙が同封されていたので読んでみた。

「この日本刀は梗稀様の為に作られた物です。
名を『煌白虎』といいます。
この様な形でお渡しする事になってしまいましたが、
何卒、ご了承ください。
敬具　海蓮」

と書かれていた。
海蓮からか…懐かしいな…

プルルルル
電話が鳴る。

「誰からだ？」

電話に出ると、
「梗稀様ですか？海蓮です。
お荷物、お届きになったでしょうか？」
！！！！！

「かっ海蓮！？なんで俺の番号知ってんだ！？」
俺が聞くと、すぐに答えてくれた。
「はい。少しばかり梗稀様の事を調べさせて頂きました。
ちなみにその煌白虎は梗稀様の誕生日プレゼントですので。」

誕生日？あぁ、そういえば今日だったっけか

「あぁ…ありがとう。
ところで母さんは元気か？」

「はい。お母様はとても元気です。
しかし…」
海蓮の言葉が濁ったので、
「どうかしたのか？」
と聞き返す。
「架仔様の容態が悪くここ暫く寝込んでいます。」

・・・！架仔が…！？
俺が絶句していると気を使ったのか海蓮は

「大丈夫です。しばらく安静にしていれば治ると
蕎様も言っておられました…」

「ああ、ありがとな…それじゃあまた連絡するよ…」

「はい。お休みなさいませ梗稀様。それでは」
電話が切れた。
まさか海連から電話が来るとはな。
すこし驚いたが、架仔のことは蕎に任せれば平気だろうしな…

そんなことを考え俺はキンジが帰って来るのを待つのであった…

第3弾　白虎の武器（後書き）

色々名前が出てきましたが、
後々登場させるつもりです。

第４弾　とばっちり

俺が部屋に戻るとキンジが帰ってきた。

並べられた弁当を見て、俺は焼肉弁当にする。

というか・・・あの謎の食い物はなんだろう？

そういえばさっき…

『アリア、ももまんっての無いんだけど・・・』

『はぁ？だったらほかの所に買いに行きなさい！無かったら風穴！！』

という理不尽極まりない会話を聞いた気がする。

『ももまん』・・・だったか？

テーブルに着き、弁当を食い始める。

「・・・。」

「・・・。」

おい！何か喋ってくれ！！気まず過ぎる！！！

「梗稀」

アリアが俺に話しかけてきた。

「なんだよ」

と俺。

「さっきの電話、何だったのよ？あとその白い刀は何？」

ゲッ・・・聞こえてたのかよ
隠す事でもないし、ここは素直に、
「あぁ・・・実家からの電話だよ。この刀は誕生日プレゼントだそうだ。」

「実家？ていうかアンタ誕生日なんだ。」
ああ・・・人生最悪のな・・・
「ふ～ん。」

そう言うとアリアはももまんを食い始めた。

・・・おいおい冗談だろ！？
コイツ1分間の内にももまん7個も食いやがった！！
どこにそんな・・・
などと思いながら弁当を食う。
するとキンジが
「・・・ていうかな、奴隷ってなんだよ」
キンジが本題を切り出した。
アリアが9個目のももまんを食いながら
「強襲科であたしのパーティに入りなさい。
一緒に武偵活動するの」

「何言ってんだ。俺は強襲科が嫌で探偵科に転科したんだ。
それに、俺は4月には一般校に転校するんだ。
武偵自体やめるつもりだ。
よりによってあんなトチ狂った所に戻るなんて無理だ。」
キンジはそう言うが、
「俺はいいぜ」
面白そうだし、アリアと武偵活動するのも悪くない。

「へぇ・・・あんたは物分りが良いわね・・・」
アリアが感心したように俺を見ると
「ついでに言っとくわ。私は嫌いな言葉が３つあるわ」
おぉ、キンジの話はスルーか。

「『無理』『疲れた』『めんどくさい』
この３つは人間の持つ無限の可能性を押し留める良くない言葉。
あたしの前では２度と使わないこと」
アリアは最後のももまんを食べながら
「２人はそうね・・・あたしと同じフロントがいいわ」

フロント。まぁ俺はもともとフロントだし構わないな。
でも怪我や死傷率はかなり高い。

キンジはアリアに向かって
「よくない！！そもそも何で俺達なんだ！！」
アリアに向かってそう言うが

「太陽はなぜ昇る？月はなぜ輝く？」
話題が急に飛んだなぁ。
「キンジは質問ばっかの子供みたい。
仮にも武偵なら自分で推理しなさい。」

「つまりは何かあるんだろ？」

彼女はおそらく、何らかの強大な敵と戦おうとしてる。
だからキンジの様な強い奴が仲間に欲しいのだろう。
『奴隷』というのはこの娘なりの『仲間』なのかも・・・

「それよりも俺はＢランクだ。

良いとは言ったが俺はそこまで強くない。
キンジと違ってな」

「『完全武人』確かあんたの２つ名よね？」

そこまで知っているのか・・・
俺の地域限定の２つ名。

「あんたは十分強いでしょ？
でもあんたは切り札を隠してる。違う？」

うっ・・・そう言われればその通りだ。

「しっかりと調べさせてもらったわ。あんたについてはね・・・」

ん？俺については？てことはキンジの事はよく分かってないのかも・・・
でもＨＳＳに感づいていない様だし黙っておこう。
だが俺についてはたいてい分かっているだろう。
こりゃ、完全に槍技は解禁したほうがいいかもな・・・

「とにかく！」
お！珍しくキンジが強気だな

「帰ってくれ！」

「まぁその内ね」

「そのうちっていつだよ！！」

「何が何でも入ってもらうわ！うんって言わないなら・・・・」

「言わねーよ。どうするつもりだ？」

「泊まってく！！」

プッ・・・こいつは本当に面白い奴だ。
やっぱ、正解だ。
情報収集能力が高いし、なにより強い。
案外、組むのも悪くないな。
まぁツンデレ体質なのは玉に瑕だけどな。

「ちょっと待て！何言ってんだ！うぇ・・・」

おいキンジ。ハンバーグがリバースしかけたぞ・・・

「うるさい！泊まってくったら泊まってく！
長期戦になる事も想定済み！」

アリアが指差したのは持ってきたトランク。
お泊りセットだったのか。

てかキンジはやばいんじゃないか？
ヒステリア的な意味で

「――でてけ！！」

これはキンジじゃなく、アリアだ。
あれ？ここはキンジの部屋のはずじゃ・・・？

アリアは両手を挙げ
「分からず屋にはお仕置きよ！
外で頭を冷やしてきなさい！！」
アリアに追い出されたキンジを眺めていると、
「あんたもさっさと行きなさい！！」
え？俺は何もしてないのに・・・
そんな事を思いながら、俺はキンジの後を追いかけるのだった・・・

第5弾　ヤンデレ強襲

どうしてこうなった。

そう思いながら、俺達は寮下のコンビニで立ち読みしていた。

「なぁキンジ。あそこってお前の部屋だよな？」

「あぁ・・・そのはずだが・・・」

俺達はアリアから「頭を冷やせ！！」と追い出された。

・・・なんで俺まで！？

俺なんか悪い事しましたか？

「そろそろ大丈夫か？」

立ち読みし、時間を潰したあと、キンジがそう言ったので、コーラを買って部屋に戻る。

おかしい・・・廊下の電気は消されており、

リビングの電気も消してある。

「帰った・・・のか？」

キンジが安心した様な表情になったその時、

ちゃぽん

風呂場から音がした。あぁなるほど。風呂ね・・・

ん？『風呂』？

まてまてまて！！！！やばい！やばすぎる！！
恐らくアリアは自分が入浴するために俺達を追い出したのだろう。
しかし！その途中俺達が帰っているのが見つかったら・・・！
風穴を開けられるだろう・・・
俺はとっさに瞬き信号（ウィンキング）で

アリア　風呂　風穴　開く　静かに
と送った。
それを理解したのかキンジはドアを静かに閉めた。
まずはバレないように武器をボッシュートしようとしたその時！！
・・・ピン、ポーン・・・
さっ最悪だ！！こんな時にあいつが来るなんて・・・！
（白雪・・・！！）

ちなみに白雪とは
本名　星伽白雪（ほとぎしらゆき）
星伽神社の武装巫女の一人だ。
キンジとは幼ななじみで、キンジのことが大好きなのだ。
世話焼きで、美人なのだが、
ヤンデレが入っているのだ。

俺は焦ってキンジに手招きしたが、
ゴンッ
ばかぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！

キンジがてんぱって転びやがった！！
「だっ大丈夫？キンちゃん？」

はぁ・・・
もう居留守は使えない。
これは諦めよう。

ガチャ
ドアを開けるとやはり巫女装束の白雪がいた。

「あ、梗稀君。こんばんは」

「こんばんは・・・」

俺は悟られないよう、動揺を隠して言葉を返す。

やばいぞこれは！！
もしアリアがタオル１枚で風呂場から出てきて
それを白雪に見られたら・・・
考えたくもない。
てか見つかんなくてもヤバイな。

「な、なんだよその格好・・・」

キンジぃ！！動揺が隠しきれてませんよ！！
そしてバスルームを見るなよ！バレるだろ！！

「あっ・・・これ、私授業で遅くなっちゃって・・・
キンちゃんに御夕飯作って届けたかったから、

着替えないで来ちゃったんだけど・・・い、嫌なら着替えてくるよ？」

「いやいいから」

白雪はキンジには従順だからな。
キンジの言う事は何でも聞くと思う。
妥当な判断だ。

「ねぇ、今朝の自転車爆破事件ってもしかして・・・」

「あぁ、俺達だよ」

白雪がすげぇ飛び上がったぞ・・・今。

「だっ大丈夫？怪我とかなかった？」

「大丈夫だから触んな」

「は、はい　でも良かった無事で。
それにしても許せない・・・！キンちゃんを狙うなんて・・・
私、絶対犯人を八つ裂きにしてコンクリ・・・じゃない・・・逮捕するよぉ！！」

怖ぇぇぇぇ！！！！なんかヤバイ事言ってなかったか！？今！！
絶対敵にまわしたくない奴Ｎｏ．１だな・・・

「こんなのは武偵にとって日常茶飯事だろ？この話は終わり！！」
キンジがそう言うと
「は、はい・・・えっと・・・はい」

本当にキンジの言う事のは従順だな・・・白雪は
アリアとは正反対だな。

「でも、今日のキンちゃん達少し変だよ？」
まずい！気づかれたか！？
「へ、変？そんな事ないだろ！！」

落ち着けキンジ！声が裏返ってる！！

「なんかいつもより冷たい気が・・・」

「白雪！すまん、今俺達銃の整備してて・・・
早くしないと銃が大変な事になるから・・・！」
俺の言い訳が通じたのか
白雪は納得してくれた。
よし。まずは平気かな・・・

「じゃあ、これ」
白雪が持っていた包みを渡してくる
「筍ご飯作ったの。私、明日から恐山に合宿でキンちゃんの
ご飯作ってあげられないから・・・」

「ああ、ありがとう。よし用事は済んだ
さぁ帰ろうな。な？な？な？」

キンジ・・・不自然すぎ／（＾ｏ＾）／オワタ

「い、一日に2食も作っちゃうなんて、
な、なんか私お嫁さんみたいだね・・・って何言ってんだろ私。

あは、あはは変だね・・・。うん。キンちゃんはどう思う？」

「分かったからお引き取り下さい白雪さん」

「わ・・・分かったって・・・それはつまりキンちゃんのお嫁・・・」

ちゃぽん

！！！！

やばいアリアが出てくる！！

「？中に誰か居るの？」

やばい！これはマズイ！！

「中に誰も居ませんよ」

なぜ敬語になるんだ！！怪しすぎだろ！！

「ねぇ・・・2人とも・・・私に何か隠してる事ない？」

「「ないない！！」」

これは絶対バレる！！ヤンデレオーラが・・・！

「そう・・・よかった」

よ、よかった・・・帰ってくれたか・・・

なんか帰り際に不快なオーラが見えた気がするが気のせいだろう。

俺達は風呂場に走る。
前門の虎の次は後門の狼だ！！
今度こそ武器をボッシュートしなければ・・・
俺達が日本刀と銃に手を掛けた瞬間
風呂場のドアが開いた。
クチナシの匂いがしているアリアと
真っ青になった俺達の時が止まる。
「へ、変態！！」
さっと胸と腹の下を両手で隠した。
まずい！弁解しないと！！
キンジと俺が弁解しようと手を挙げると
キンジの手にした鞘にパンツが、
俺が持ち上げた銃にはブラが、
トランプのマークがプリントされた子供っぽい・・・
「し、死ね！！！！！！！」
キンジが顔面を強打されたのを見て、俺は窓から逃げようと試みるが
「逃がさないわよ！！この変態！！！」
俺が飛び降りようとした瞬間

アリアが俺の腹にフック、そして首にラリアットを食らった。
そのまま東京湾に転落した。

俺はそのまま気絶した・・・

あぁ最悪の誕生日だ・・・

第６弾　強襲科の模擬戦～ＶＳアリア～

「バカキンジ！！ほら起きる！！」

朝から大声をだしてアリアがキンジの腹にグーパンチを叩き込む。

「ったく・・・朝から騒々しいな・・・」

俺は珍しく早起きし、朝飯を食っていると

キンジがアリアの攻撃を避けながらリビングに出てきた。

「おう梗稀。おはよう」

「おはよう・・・朝からうるさいぞ」

俺が文句を垂れながら朝飯を食っていると

「うまい事言って逃げるつもりね！！」

アリアが仁王立ちしてキンジの腕に掴み掛かった。

「離せ！このっ！」

キンジは腕を掴まれ、更には腕を噛まれている。

「嫌だ！離すもんか！キンジ達は私の奴隷だ！！」

俺がその光景を眺めているとアリアが

「あ、梗稀！それ私にもよこしなさい」

俺の朝飯を指して言ってくる。

「ほらよ。」

俺は買ってきた焼きそばパンをアリアに投げる。

それを食い始める。

そしてキンジが
「それより梗稀！５８分のバスに遅れるぞ！！」
もうそんな時間か！
俺はキンジと寮を出た。・・・キンジがアリアを引き摺る形で、

俺達は何とかバスに乗り、学校へ向かった。
一般授業が終わり、強襲科の授業なのだが・・・

「おーし。今日は模擬戦してもらうで～」
『そうだ。京都に行こう』的なノリで言ったのは
強襲科の不良教師、蘭豹（らんぴょう）だ。
なんでも、マフィアの愛娘らしい。

「それじゃー・・・神崎と軌条！模擬戦やれや」
ゲッ・・・よりによってアリアとかよ！！
でも断ったら発砲されるから断れない・・・

「梗稀。ここでアンタの本気を見せなさい。」
アリアは戦るき満々だし、やるしかないな。
俺は目を閉じ、数秒黙り込む。

・・・長い瞬きを終え、目を開ける。
『鳳凰モード』
このモードは自身の全ての能力を一気に底上げする能力だ。

俺の使う『朱雀』の力を最大限に引き出す事が出来るのだ。

「それじゃあ・・・始め！！」

蘭豹がグロックを発砲すると同時にアリアが三点バーストで射撃してくる。

俺はそれを朱雀槍で弾きつつ、アリアに突撃する。

朱雀槍を収納し、白虎刀を取り出す。

・・・出し惜しみは無しだ！！

「白虎流　白薙（はくなぎ）！！」

この前修行中に編み出した技を繰り出す。

この技は、空気に刀の粒子を乗せ、分子レベルの細かい斬撃を放つ技。

それをアリアは難なく避ける。やはり強い。

「梗稀！やるじゃない！でもこっちの番よ！！」

アリアは小太刀を２つ抜き、突撃してくる。

それを俺は白虎刀で受け止める。

「梗稀。正直あんたを過少評価してたわ。Ｓランクにも劣らない実力ね！！」

「そりゃどうも！」

俺はアリアの小太刀を弾き、朱雀槍を取り出す。

距離を取り、アリアが距離を詰めた瞬間

「甘いぜ！必槍　朱雀炎舞（すざくえんぶ）！！」

カウンターの突きを入れる。アリアはそれに耐え切れず吹き飛ぶ。

だがすばやく受身を取り、拳銃（ガバメント）を取り出し、接近してくる。

拳銃近接戦《アル＝カタ》か・・・受けて立つぜ！
鳳凰モードの俺はすばやく青龍の銃を取り出し、
即座に発砲する。
「甘いわ！」
銃弾が弾き返される。

まずい！ここでは距離が近すぎる！
・・・仕方ない。使いたくなかったが奥の手だ・・・
アリアが小太刀を振るった瞬間、俺は消える。

「！」
会場が驚きにざわめいている。
「ここだよ！」
俺は天井から声をかける

「あっあんた今何したのよ！？」

「簡単な話さ。飛んだんだよ」
そう。鳳凰モードの跳躍力はすさまじい。
まるで、飛び立つ鳳凰の様に飛べるのだ。

「面白いわ・・・ますます気に入った！」

そう言うとアリアは俺に向かって発砲する。
俺はそれを避け続ける
さっきの拳銃近接戦で残弾はもうない。
これじゃあ埒が明かないな・・・
しょうがない・・・

俺がＤＥを取り出した瞬間

「そこまで！！」
蘭豹の静止がかかった。タイムオーバーだ。

授業が終わるとアリアが
「梗稀。あんたやるじゃない！少し見直したわ」
とりあえずアリアが満足してるからいいか・・・
ま、８割鳳凰モードのおかげだけどな
そうして俺達は帰路に着くのだった。

第６弾　強襲科の模擬戦～ＶＳアリア～（後書き）

軌条　梗稀

『鳳凰モード』
全ての能力を底上げする
特別な能力。
梗稀の使う朱雀槍の能力が一番上がる。
そのほかにあと３つの能力がある。

朱雀炎舞
敵を一掃するのに長けている技だがカウンターにも使える。
鳳凰モードでのみ使える大技。

第7弾　ネット怪盗理子

授業が終わり、俺とキンジは女子寮前の温室で理子を待っていた。

「そういえば今日強襲科で模擬戦やったんだって？どうだった」

「まぁ惜しいとこまで行ったけどタイムオーバーだった。」

「やっぱり鳳凰モード使ったのか・・・」

キンジは俺の体質を知っている。

まぁ俺もヒステリアモードの事知ってるからおあいこだけど。

「キンジはアリアと組まないのか？」

「あぁ。俺は絶対な・・・」

チッ強情な奴め・・・

まぁそれなら俺にも考えがあるぞ・・・

授業後、アリアと作戦を考えたんだからな。

第1の作戦はキンジに1度きり組んでもらい、流れでそのまま組む。

第2の作戦はアリアが蜂蜜色の罠（ハニートラップ）を仕掛け、ヒステリアモードにする。

まぁ後者は俺の独断で考えたけどな。

言ったら多分殺される・・・いや、間違いなく・・・

「そういや今日は何してたんだ？」

「猫探し」

0．1単位の簡単な依頼(クエスト)らしかった。

「1日アリアから開放されてよかったな」

俺が嫌味っぽく言うと同時に

「キーくーん！コーくーん！！」

右手をぶんぶん振って理子がやってきた。

どうでもいいが遅刻だぞ。

「理子」

「おっす」

コイツ風呂入ってきてやがる。シャンプーの匂いがする。

そういえばコイツ、相変わらずの美少女だよな・・・

性格は残念だけど。

アリアのちっこ可愛さと白雪のプロポーションを重ねたような

欲張りな体型だよな。

「相変わらずの改造制服だな」

「これは～白ロリ風アレンジって言って～」

「「どうでもいい」」

二人でそう言うと理子は膨れて、

「いい加減ロリータの種類ぐらい覚えようよ～」

とか言ってるが絶対に嫌だ！！

「それより理子、こっち向け。いいか？ここでの事はアリアには秘密だぞ」

「うー！らじゃー！」

頭の上にウサギみたいに手をつけ、敬礼の真似事をする理子に俺は紙袋を渡した。

「これが報酬だ」

これは理子限定の報酬だ。俺とキンジで秋葉原行って買ったな・・・畜生・・・情報のためとはいえめちゃくちゃ恥ずかしかったぞ。

「うわあああ！『しろくろっ！』と『白詰草物語』と『妹ゴス』だぁぁぁ！！」

理子に渡した報酬というのはゲームだ。Ｒ－１５指定のいわゆるギャルゲーである。

実は理子はオタクなのだ。ゴスロリとかが大好きなのだが、ゲームショップで店員に中学生と間違われて買えなかったんだと。学生証をみせればよかっただろうに・・・

「あ・・・これとこれはいらない。理子はこういうの嫌いなの」

えーと、続編の奴だな。２とか３って言う。

「なんでだよ？それほかのと似たような奴だろ？」

まぁ４０００円近くのゲームを３本買った金欠のキンジには当然の疑問だろう。

「違う！2とか3なんて蔑称。個々の作品に対する侮辱」

「よくわからんがまぁいい。それ以外はくれてやる。その代わり・・・」

キンジの言いたい事を先読みしたのか理子は

「アリアの情報でしょ？」

さすが探偵科のAランク武偵。

コイツはこんなだがネット中毒で覗き、盗撮聴、ハッキングなどあらゆる情報収集能力に長けている。

でも依頼の度にあんなゲームを買わなきゃならんのは困り者である。

「ねぇねぇ、2人はアリアの尻に敷かれてるの？

彼女なんだからプロフィールぐらい自分で聞けばいいのに」

まぁ聞いた所で『武偵なら自分で調べなさい』と返ってくるだけだがな。

「彼女じゃねぇよ」

「え～？アリアは2人と付き合ってるって噂だよ？

ファンクラブの連中が殺すって息巻いてたんだよ？がおー」

まじでか！てかファンクラブがあるのか・・・

「角を作らなくていい」

俺はともかくキンジは仕方ないな。

あれは見方によっちゃ抱きついている様に見えるからな

「ねぇねぇどこまでしたの？」

「どこまでって？」

「えっちぃこと」

「「するかバカ！！」」

2人がハモる。全力で否定するぞそれは。

「嘘つけぇ健全な若い男女の癖にぃ！！」

そんな顔で言う事か・・・

「お前はいつもそっち方向に話を飛躍させる・・・悪い癖だぞ」

「ちぇ～」

「それよりアリアの情報だ。」

「コー君は知ってると思うけどSランク。
Sランクは2年じゃ片手で数える位しかいないんだよ」
レキもその1人だ。よくよく考えれば今日の模擬戦ではSランクと張り合ってたのか・・・ゾッとするぜ。

「それに理子よりちっこいくせに徒手格闘も上手くてね。
流派はボクシングから柔道まで何でもありの・・・
え～とバーリ・・・バーリー・・・」

「バーリ・テゥードか？」

「そうそれ。イギリスでは縮めて格闘技(バリッ)って呼ぶんだって」
「拳銃とナイフはもう天才の域。どっちも二刀流なの。
両利きなんだよ」
確かにあいつは両方で撃ってたしな。
「それは知ってる」
「じゃあ2つ名は？」
アリアには2つ名まであるのか！？
優秀な武偵には自然とつくものだからな。
まぁ地域限定の2つ名なら俺も持ってるがな・・・
理子はニヤリと笑い
「双剣(カドラ)双銃のアリア」
武偵用語で2つの武器を使う事をダブラという。
つまりは4つの武器を使うのだ。
鳳凰モードなら俺もカドラだがな
「笑っちゃうよね・・・カドラだってさ」
笑い所が分からんのだが・・・
「そういや、アリアの実績はどうなんだ？」
「あ、うん。アリアは14歳から武偵としてヨーロッパで活躍して
いて・・・」

「犯人を1度も逃がした事が無い。」

「本当か？」

やっぱりすごいんだな・・・

「狙った相手を全員捕まえてる。しかもたった1度の強襲で」

「なんだって？」

俺とキンジは絶句する。

普通犯人逮捕するときは何度か強襲するものだ。

それを1度きりで・・・

「ほかには・・・？」

「う～んと、アリアはお父さんがイギリス人とのハーフなんだよ」

「てことはクオーターか」

日本人離れしている訳だ。

「で、ミドルネームが『H』家。おばあちゃんはディムの称号を授かってるんだよ。」

アリアは貴族なのかよ！？イギリス王家から女性に与えられる称号持ちだなんて・・・

「でもH家の人とはうまくいってないみたいなんだよねぇ・・・。だから家の事を言いたがらないんだよ。まぁ理子は知っちゃってる

けどねぇ・・・」

H家か・・・分からんな。
外国の有名人自体あんま知らないし・・・

「教えろ！ゲームやったろ！！」

「理子は親の七光りとかそういうのは大嫌いなんだよぉ。
イギリスのサイトでググれば目星ぐらいつくんじゃない？」

くそ・・・コイツにこれ以上聞いても無駄そうだ・・・

「それじゃ！理子は帰ります！」

理子はそのまま去っていってしまった・・・
それにしてもH家ってのはどこなんだ・・・？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0886x/

緋弾のアリア～誓いの一閃～

2011年10月10日09時38分発行